



株式会社ペーパル取締役
矢田和也さん

廃棄米を紙に 食品ロスへ取り組み

紙製品の企画や販売を手掛ける株式会社ペーパル(奈良市池田町・矢田武博代表取締役)は、廃棄される備蓄米を活用した紙素材「kome-kami(コメカミ)」を今年2月に完成させた。米を紙にするため試行錯誤を重ね、約1年を費やした。取締役を務める矢田和也さん(33)は「社会的コストを価値に変え、その対価の一部を食品ロスを無くす活動に寄付する。そういった付加価値のある商品を提供していきたい」と展望を話す。

Made
in
奈良

奈良市 株式会社ペーパル

同社が手掛ける廃棄米を使った「komekami」の開発は、自治体に災害時用の備蓄食品が増えている一方で、保存期間を過ぎた食品の廃棄量が増加していることを知ったことから始まった。SDGsへ向けた取り組みとして災害用備蓄食品を回収することで社会的なコストを価値に変え、さらにそれで得た対価の一部を食品ロスを無くす活動に寄付し、支援したいという思いがあった。

「食品ロスを無くしたい」「SDGsの考え方の循環型社会を目指したい」など、そういった思いを持った企業から問い合わせがあった。矢田さんも「この紙を使うとkomekamiのロゴと一緒に、環境に向けた取り組みをしているということが分かる文字の印字を始めています。対外的に目に触れる封筒や名刺を始めとするノベルティにこの紙を使い、各企業さまがSDGsに取り

さんは「ここまで集まるとは思っていませんでした。クラウドファンディングサイトは個人が利用していることが多く、個人の方でもこれほど環境問題に意識が高いのかと実感しました。また企業からも100件ほど問い合わせが来ています」と語る。

組んでいるということのアピールする、1つの素材として使ってほしい」と力を込める。

そんな問い合わせの中には、SDGsの取り組みの普及に力を入れる滋賀県庁からも使いたいと連絡があった。紙が完成した2月に早速パンフレットとして使用。説明するまで米でできている紙とは思えない品質に、手に取った企業などから使いたいという声があったという。

紙の質感としては上質紙に近く、万年筆やボールペンが書きやすい。色は採れたての艶やかな米を思わせるナチュラルな白さに仕上げている。用途として矢田さんは「和紙のような紙では使えないものが限られてきます。komekamiは通常の紙のように何にでも使いやすいものになっていて、インクの乗りも綺麗です」と話した上で「今後はプラスチックの代替品として使用するなどの付加価値の高い商品展開

を考えています」と話す。現在、コロナ禍でイベントの中止が相次ぎ、チケットやチラシの印刷が減少している。奈良から関西全域にシェアを拡大して売り上げを伸ばしているペーパルは、それを補おうとビニール袋を紙袋に、またビニールファイルを紙ファイルにしてもらうなど付加価値の高い商品の提案を進める。

「特にうちの強みとなっているのは関西同業者の中でもトップクラスの在庫量を有することです」と、矢田さんは話す。ペーパルは計約7775平米の倉庫を有し、最大50000ポットの紙の在庫があるという。

矢田さんは「同業者の中で結構ちゃんと持っているところでも100ポットぐらいになるかと思えます。紙不足や災害があっても、うちは供給することが出来る。倉庫が大きいのでメーカーが受け取りたい時に欲しい量をそのまま供給出来る。また大量に取り扱う

ことで価格を安く抑えることもできます」と胸を張る。「迅速に商品を渡すことができ、さらに価格も安い。次は『うまい』というところで社会的需要のあるという付加価値をつけていきたい」と展望を語る。

最後に「廃棄米がなくなるような社会にしたいと考えています。コストを価値に変え、その対価で食品ロスの活動を支援する。この取り組みをさらに拡大して食品ロスがなくなる世界を目指していきたい。また、奈良で創業した会社としてやっぱり奈良発の価値の高い商品を販売し続け、微力ながら奈良の経済発展に貢献していきたい」と未来を見つめる。

同社は4月から約1カ月の間、クラウドファンディングを通して「komekami」を使ったノートや名刺を販売。目標金額を10万円に設定し、最終的には約70万円が集まった。これに矢田



「komekami」を使用している。下部にはロゴと一緒に廃棄米で作った素材であることを記載している。

紙の質感としては上質紙に近く、万年筆やボールペンが書きやすい。色は採れたての艶やかな米を思わせるナチュラルな白さに仕上げている。用途として矢田さんは「和紙のような紙では使えないものが限られてきます。komekamiは通常の紙のように何にでも使いやすいものになっていて、インクの乗りも綺麗です」と話した上で「今後はプラスチックの代替品として使用するなどの付加価値の高い商品展開

を考えています」と話す。現在、コロナ禍でイベントの中止が相次ぎ、チケットやチラシの印刷が減少している。奈良から関西全域にシェアを拡大して売り上げを伸ばしているペーパルは、それを補おうとビニール袋を紙袋に、またビニールファイルを紙ファイルにしてもらうなど付加価値の高い商品の提案を進める。

「特にうちの強みとなっているのは関西同業者の中でもトップクラスの在庫量を有することです」と、矢田さんは話す。ペーパルは計約7775平米の倉庫を有し、最大50000ポットの紙の在庫があるという。

矢田さんは「同業者の中で結構ちゃんと持っているところでも100ポットぐらいになるかと思えます。紙不足や災害があっても、うちは供給することが出来る。倉庫が大きいのでメーカーが受け取りたい時に欲しい量をそのまま供給出来る。また大量に取り扱う



○創業=明治23年(1890)年
○代表取締役=矢田 武博
○従業員=40人
○資本金=3000万円
○事業内容=紙卸問屋
○所在地=奈良県奈良市池田町76-7
○電話番号=0742(62)6211
○ファクス番号=0742(62)5506



紙が完成した2月に、SDGsの取り組みの普及を推進する滋賀県でパンフレットに使用された